

学び歩く

「それからの定有堂」 その十二

奈良 敏行

定有堂教室の読書会ではわたしは場所を用意するだけだが、長く続くこの場所の設定にもわたしの偏りの枠が生じる。その枠を逃れて外部へ出たくなる。それで「まち」に学びを求め続ける。「笈（背のう）」を背負って「まち」中を歩く。十二月（二〇二四）は交流ポラーナの「新聞を読む」と「司馬遼太郎を読む」に参加した。主宰は浜本純逸さんという碩学だ。最初の出会いは定有堂書店のカウンター越しだった。ちょうど『ロシア・ソビエト文学教育史研究』（溪水社）を上梓された直前だったので、二〇〇八年ということになる。

東京の大学を引退し鳥取に永住するということだった。出身地は四国だ。一六年前の話だ。今年の春からこの「交流ポラーナ」を開塾する。八十八歳の春だ。この場所は四、五十年前に、地域で一番有力な書店があった跡で、覚えてる人は少ない。浜本先生も知らないはずだ。

「笈」を背負い、会場の二階に上がり、少し早かった1-1ので壁面の書棚に目を通す。浜本先生の公開蔵書だ。前回借り出した『鶴見俊輔集 方法としてのアナキズム』と、勧められた『松岡正剛の書棚』を、「笈」から出して返却する。

この日は「司馬遼太郎の世界」の三回目だった。浜本先生と元新聞社に勤めていた岡村洋次さんの企画だ。参加者は十人程度だが熱心な司馬文学の読者というわけではなかった。読んだことのない人も多かった。わたしは若い頃読んだが、もはや記憶からは消え失せている。

浜本先生はこの会の主旨をこう語る。「自分の意見は言わなくていい。隣の人と話をする力を養うべきだ。表現の仕方を学ぶだけだ。」と。報告者が、三十分で用意した資料を説明し、後は雑談というのを理想とする。聞くことが大事なんだと理解し、わたしはほとんど発言することはない。意見を求められても、この学びの機会に感謝の意を表すだけだ。

司馬文学は自分の事を書く私小説でなく、社会の中の「自分」を考える文学だと、浜本先生は語る。その意味では松本清張が似ているとも。そういえば司馬は、「この国」という言葉を好んで使う。「この国」がどのような成長期にあり、それ故どのような宿命を帯び、どのような人間典

型を生み出すか、それがその文学の主題なのだ。

浜本先生は「人間の面白さを書いた文学」だという。作者が何を「面白い」と思っているかという観点から読むと興味深いとヒントをくれる。一言でいえば「奇行が何ごとかを為す」この一事だ。奇行とは何か。「志」が強すぎることだ。そこに「美しいもの(仁)」と正義(力)「が生じると解釈する。そして破滅することを省みずつき進む。近代人は妥協することを知っているが、ここには「妥協」という言葉はまだ生まれていない。

司馬文学はその典型的人物をいくつか描いたが、今日は河井継之助を例にとると浜本先生はいう。『峠』の主人公だ。「この国」は「幕末人」という奇形の人間を生んだ。サムライである。鑑賞するに足る純粹結晶だという。幕末の動乱期は「類型のない美的人間」としての武士という人間像をうみだした。

河井継之助は越後長岡藩の非門閥家老だ。動乱の舵取りを任された実力派なのだ。託された使命は「いかに藩をよくするか」、「延命するか」だったのに、ためらうことなく「正義」を選び、官軍に降伏することを潔しとしなかった。江戸期儒教徒として、実利を離れ「いかに美しく生きるか」という武士道倫理を明確にする。ゆえにこの敗北は挫折でなく完成であった。「義」に生きるということは常

識のもとには生きないということだと、浜本先生は結論を語る。

会場には地域史家も二人いて緻密な検証を付け加えた。意図的なのか、事実と異なる記述がいくつかあると指摘された。浜本先生の文学的視点とこの史家の教えがこの日の収穫だった。

終了後少し居残って雑談をし、帰りの「笈」には、『江戸問答』と、勧められて、官憲に殺害された小林多喜二や三木清を描いた『アンブレイカブル』とを詰め込んだ。

わたしの物語の現在はこの「笈」と、詰め込まれた書物をめぐる遊行にある。むろん行脚の光景もそれに加わる。十分奇行なのかもしれない。

2024.12.18

『鶴見俊輔集 方法としてのアナキズム』筑摩書房 1991

『松岡正剛の書棚』中央公論社 2010

柳広司 『アンブレイカブル』角川書店 2021

田中優子・松岡正剛 『江戸問答』岩波新書 2021